五雲会

二〇一九年九月十四日（土）
開演 十二時（正午）
開場 十一時
於 宝生能楽堂

12:00

通小町

ツレ 金森 良充
シテ 水上 優

ワキ 森 常好

大鼓 柿原 光博
小鼓 田邊 恭資
笛 小野寺竜一

後見 宝生 和英
藪 克徳

地謡 木谷 哲也
今井 基
金野 泰大
佐野 玄宜
高橋 亘
佐野 由於
金森 秀祥
渡邊 茂人

13:00

狐塚

小唄入

山本 則重

山本 則俊
山本 則秀

〈休憩十五分〉

13:40

玉葛

シテ 小林 晋也

ワキ 村瀬 提

入部
小鼓 飯冨 孔明 原岡 一之
笛 寺井 義明

間 山本凜太郎

後見 大友 順
澤田 宏司

地謡 上野 能寛
辰巳 和磨
川瀬 隆士
當山 淳司
佐野 登
朝倉 俊樹
東川 光夫
和久荘太郎

15:05

紅葉狩

シテ 東川 尚史

ツレ 内藤 飛能
〃 佐野 弘宜
〃 金森 隆晋

ワキ 則久 英志

ワキツレ 野口 能弘
〃 梅村 昌功
〃 野口 琢弘

大鼓 大倉栄太郎
小鼓 清水 和音
太鼓 徳田 宗久
笛 藤田 貴寛

間 山本 則秀
〃 若松 隆

後見 小倉伸二郎
亀井 雄二
朝倉 大輔
木谷 哲也

地謡 藤井 秋雅
金井 賢郎
田崎 甫
辰巳大二郎
小倉健太郎
山内 崇生
野月 聡
高橋 憲正

〈休憩十五分〉

終演予定 十六時二十分頃

演目の解説

能 「通小町」（かよいこまち）

八瀬の里に住む僧のもとに、若い女が木の実を持って度々通って来ます。僧が木の実の名前を尋ねると、色々の名を挙げ、何故かいくつか の椎の実の名をとどめ、更に自身の名を問われまるとの野小町の名を仄めかしつて消え失せます。小町原野へ行きます。小町にて執心の草少将の霊が現れ、小町の深草少将の霊も現れ、小町の死んでに百夜通い、九十九夜目に空しく死んでまった有様を見せ、共に成仏を願いします。

狂言 「狐塚 小唄入」（きつねづか）

主人は太郎冠者と次郎冠者を呼び出し、鳥が田を荒らすので、狐塚にある田に行って番をするように命じ、夜になると、狐塚には悪い狐が出て人を化かすからと、鳥を追うための鳴子を持たせて出かけさせます。狐塚に着いた二人は、さっそく鳴子を振って鳥を追うが、日が暮れたので休むことにしました。そこに主人が、酒をもって見舞いにやってきた。二人はてっきり狐のしわざと思い込んで、狐の正体を明かそうと松葉を焼いて主人をいぶし、縛り付けます。＊小唄入の演出があり、鳥を追う場面での小唄が抒情性を増しています。

能 「玉葛」（たまかずら）

長谷寺に参詣する僧が初瀬にさしかかると、川舟を操る女性が通りかかります。女は、僧を二本杉に案内し、源氏物語の中で、玉葛が母の夕顔の死後、九州に下って乳母に育てられていたが、都に上ってこの二本杉で母の侍女であった右近に会い、光源氏に引き取られることを語ります。そして自分と玉葛の霊と名乗ります。そして消え失せます。後半、弔いの内に玉葛は狂乱の体で現れ、我が身に降りかかった男たちの妄執の苦しさを語ります。

能 「紅葉狩」（もみじがり）

平維茂は信州戸隠山に鹿狩りに出掛け、山中で酒宴を催す美女達に出会います。不審に思い、遠慮する維茂は引き留め、酒を勧め舞を舞います。女達は維茂が寝入ってしまうのを見計らって女の舞が急転すると、女達は消え失せます。ここに八幡宮のあの維茂は寝入っています。この鬼女は戸隠山の鬼女で尚も遺いが現れ、今の女は戸隠山の鬼女であると告げ、この太刀で退治したまえと言って太刀を授け、目を覚ました維茂は鬼女と戦い、切り伏せて去って行きます。

次回予告

二〇一九年十月十九日（土）正午 始

敦盛 辰巳 和磨
井筒 大友 順
葵上 澤田 宏司

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会